

# ハイマート Heimat

## ぐんま日独協会 会報

2012年7月28日

# 40号

発行者 鈴木 克彬  
発行所 ぐんま日独協会  
〒371-0105  
群馬県前橋市富士見町石井 2445-219  
電話 : 027-288-4297  
E-mail : info@jdg-gunma.jp

ホームページ : <http://www.jdg-gunma.jp/>

ホームページ右下『ハイマート』から本誌をカラーでご覧いただけます。



ドイツ音楽サロン出演者

1. 会長あいさつ	2
2. 平成24年度ぐんま日独協会総会概要報告	2
3. ドイツ音楽サロン in 軽井沢	3～5
4. 関東甲信越若手の合宿を終えて	6
5. ドイツ紀行文	
5-1. 緑もえるドイツを訪ねて	7～9
5-2. パンツァー先生訪問記	10～12
6. 28年間のドイツ生活を振り返って	13～14
7. 高校ドイツ留学体験記	15～16

## 1. 会長挨拶

### 蒔かぬ種は、はえぬ

・・・ドイツサロンから学んでいること・・・

会長 鈴木克彬

ぐんま日独協会は、毎月第一土曜日の午後、高崎にあるドイツ ロンネフェルト紅茶店“陶豆屋のロビー”をお借りして、『ドイツサロン』という“ティーサロン”を開催しています。

当日は、関係者のご好意を得て、在日中のドイツ人を東京から迎え、テーマを決め、日独の関心事、発想の違い等、諸々のことを日本語、ドイツ語を混じえ、話し合います。参加者は、仕事や留学等でドイツに在住された後帰国された方、これから仕事・留学・旅行等でドイツ行きを予定している人等々です。思いやテーマはさまざまですが、共通点は、『ドイツに関心が有り、またドイツが好き』ということです。参加者は常時30～40名程で、その盛り上がりは、時には時間を忘れるほど盛況です。

改めて考えてみると、このサロンの誕生は、過去4回隔年で実施している『ドイツフェスティバル in ぐんま』というイベントから派生したものであり、若手クラスの入会にもつながっています〔サロンのスタートは2007年8月〕。

好評で継続している企画や、一回限りで終わった企画等はケースバイケースとしても、今後とも“トライすることの大切さ”“種蒔きを果敢に行うこと”を教訓として、会員皆さんの協力を得て、意義ある行事を一步一步進めていきたいと思えます。

## 2. ぐんま日独協会 平成24年度総会概要報告

平成24年4月28日に当協会定期総会が、県庁昭和庁舎にて開催され議案4件が提案どおり承認されました。詳細はすでに会員宛に送付されている通りです。

総会后、当協会会員の南和友 北関東循環器病院院長による「ドイツで30年、外科医療にたずさわって・・・日本とドイツの医療の違い・・・」と題した講演がありました。日独の医療現場の違いを自らの体験をもとに分かりやすく語っていただきました。ドイツ心臓外科医の年間執刀件数が日本より一桁以上多いこと、専門医と家庭医の使い分けの仕組み、そして日本では医療施設の数が多く特に高額医療器械や高度専門医などが分散してしまっていることなどなど、非常に示唆に富んだ内容でした。この講演は一般にも公開され、地元の上毛新聞でも取り上げられました。

### 3. 「ぐんま日独協会 ドイツ音楽サロン in 軽井沢」(松原千津子 記)

去る7月7日(土)、ホテルグリーンプラザ軽井沢のプレジールにおいて、ぐんま日独協会主催の「ドイツ音楽サロン in 軽井沢」が開催された。

元々、ぐんま日独協会員のメンバーの中にはドイツ等に音楽留学の経験を持つエリートも数多く、優秀な人材が揃っていた。昨年、当協会主催の第4回ドイツフェスティバルにおいて日独交流150周年記念の音楽イベントを群馬県庁で行ったことを契機に、是非ぐんま日独協会員によるサロンのような音楽会を開催したいと考えたのが、実現したと言うわけである。

音楽会は、午後1時より鈴木克彬 当協会会長の挨拶で始まり、来賓の木村敬三 全国日独協会連合会会長代行(元駐独大使)や熊川 孀恋村村長からも挨拶をいただいた。



来賓の挨拶をされる木村敬三連合会会長代行(左の写真)と熊川孀恋村村長

#### 第一部

第一奏者は「ケルツェンリヒト」というグループ名の島村敦子さん・芙美江さん・和香江さん親娘による、ヘルマンハープを中心とした演奏だった。ヘルマンハープとは? 初めて耳にした方も多いかと思うが、その名前の由来はドイツの農場主ヘルマン・フォー氏が、



ダウン症の愛する我が子アンドレアの為に長い年月工夫を重ねて開発した楽器である。形は小型のハープだが、楽譜は黒や白の実線や点線で書かれており、それを弦と表板の間に差し込んで演奏する。そのハープから醸し出されたヨハン・パッヘルベルのカノンは、スローテンポでありながら静まりかえった会場の観客を天上に導くかの如く、心地好い音色だった。また、母親の敦子さんが話してくれたドイツの昔話の「お婆さんの家」も大変興味深かった(内容は省略)。こんなに素敵な演奏をしてくれた島村さんだったが、時間が足りなく練習不足だったと、ふと洩らしていた。

第二奏者はピアノの澤田まゆみさんだった。澤田さんは、シューマンがかつて一つ一つの音をアルファベットに代えて、暗号の如く曲を作っていた事を説明してくれた。そのシューマンの曲を



澤田さんは、力強く情熱的に演奏した。その瞬間、聴いている誰もが心を激しく揺さぶられ、まさに澤田さんとピアノが一体となって、澤田さんがシューマンになり、シューマンが澤田さんでもあるかのような錯覚に陥った。このサロンを企画した澤田さんは、演奏家とオーディエンスの距離感を無くして、音楽について熱く語り合う時間をもう少し確保したかった、と話していた。

続いて第三奏者は、頌彦守真（うたさともりみ）さんのソプラノと増田勝美さんのピアノによるオペラだった。頌彦さんのドイツ語のオペラは、余りの迫りに聴いている者が圧倒された。張りのある声量とその美声はパーフェクトの発音。誰もがその魅力に引きずられていった。そして、そのソプラノに合わせて増田さんのピアノが絶妙なタイミングで音を奏でていた。特にシューマンの大人の恋の歌が切なくもあり、献身的にも聴こえていた。そして、そのシューマンの妻であるクララ・シューマンの曲は、まさに春の歌で心が弾む、カンタビレそのもの！ 小鳥がさえずり、庭には花が咲きみだれるような気持ちがワクワクする曲であった。頌彦さんは、今回の音楽会でドイツ語とドイツ文化に触れ、若い頃を思い出したと言う。そして、これからもドイツ文化に携わっていきたいと話された。



#### ————— 休憩 (tea time) —————

### 第二部

第二部の第一奏者は、指笛の長井宏之さんだ。指笛とはその名の通り手の指を使って音を出すわけだが、主に小指を曲げて音を作り出す。何の楽器も使わないで、素晴らしくはっきりとした曲が奏でられるのを間近に観ていると、まるで魔法のようだった。

「野ばら」と言ったらシューベルトを思い浮かべるが、長井さんの演奏された曲はヴェルナーの「野ばら」だった。この曲は、シューベルトから 14 年遅れて作られたそうだ。シューベルトに比べたら、音が心なしか軽やかに聴こえた。指笛は、最初の音を出せるまでが大変な苦勞との闘いだそうだ。それを曲に作り上げるまでの努力と技術力には、驚かされた。最初のピーという音が出せるようになれば、全体の 3 分の 1 は完成したようなものと、江戸家猫八の話为例にして、長井さんは語ってくれた。



次に演奏してくれたのは、山本すぎなさんのアルトと小田原由美さんのヴィオラ、それに立川統子さんのピアノによるブラームスの曲だった。この曲はいかにも一昔前のセピア色がかかった懐かしい映画の中に入り込んでしまいそうな歌で、山本さんの尊いアルトの歌声と、それに合わせた小田原さんのヴィオラと立川さんのピアノが絶妙

なハーモニーを醸し出していた。とても一言では言い表せない崇高な芸術の世界に魅せられた。母が子供を想いやる情熱を感じる子守唄は、いかにもブラームス独特の曲の流れと力強さを感じた。ピアノの立川さんが話してくれた、ドイツでのブラームス館でのエピソードも面白かった。



そして、最後のトリを飾ったのは、我がぐんま日独協会の会長夫妻だった。チロルとバイエルン地方の **Tanz** であった。最初に踊られたのは、ブランデースヴァルツァー（スイス）で、舞踏会や社交界で踊られるようなとても上品なダンスであった。その後、皆に観せてくれたのは、50年間手を繋ぎ連れ添ったオシドリ夫妻だからこそ出来る技術を要する知恵の輪みたいに目を惑わす、ちょっと不思議なダンスだった。オルゴールの上を踊る人形みたいで、観客を和ませてくれるウィンナーワルツになっていた。バイエルンタンツは、力強くステップにリズム感があって気持ち良かった。最後には、会長が奥様をリフトアップして、皆をあとと言わせた。会長いわく、リフトは力ではなくタイミングが問題だそうだ。これも夫妻ならではの息の合ったペアだからこそ出来るのであろう。外は、あいにくの雨だったが、この音楽会では織姫と彦星と一緒にダンスを楽しめたようだ。



3時間にわたる「ドイツ音楽サロン in 軽井沢」は、對馬副会長の挨拶で幕を閉じた。観客はもちろんの事、演奏者などからも今回の音楽会の開催に感謝したいという声が多かった。是非、次回も近いうちに開催して欲しいと思った。また、早朝からピアノの調律をしてくれた吉田博文さん（\*註参照）の陰の働きも大であった。

尚、今回の音楽会にあたりご協力頂いたホテルグリーンプラザ軽井沢のスタッフの皆さんにも感謝したい。本当に日頃の雑音を忘れられた素晴らしい一日だった。

（\*事務局註：ページ13に吉田博文会員の28年間のドイツ生活についてのインタビュー記事が掲載されています。）

#### 4. 関東甲信越若手の合宿を終えて（長谷川早苗 記、写真：成田美和・高野誠）

7月14・15日の二日間、国立赤城青少年交流の家にて40歳くらいまでの会員を対象とした合宿が行われました。群馬、東京、千葉、長野から、日本人17名、ドイツ人6名、中国人1名の計24名が参加し、今後の活動について話し合いました。この企画の発端は、4月の全国総会に併せて行われる「若手会員の集い」です。数年前の草津の全国総会時から全国の若手が集まり、1年間の活動や課題などをお互いに報告してきました。今年は全国を近隣グループ毎に分けて、共同でできることはないかを相談しました。その際、じっくり話せる場として関東甲信越グループで提案されたのが今回の合宿です。



初日のテーマは、「若い人／ドイツ人を集めるにはどうすればいいか」。全員が意見を出せるよう、まずは4～5人でグループとなり、その後、全体で検討するという形をとりました。20以上ものアイデアが集まり、ネットの活用、大学への働きかけといったものから、ホームステイ希望者の橋渡し、若者担当者の配置、ドイツ人向け日本語教室、若い人／ドイツ人が興味を持ちそうなイベントなどの案が続々と挙げられました。



2日目は前日のアイデアを振り返りながら、「では、実際にどんなことができるか」を具体的に考えていきました。とくに賛成の声が集まったのが、次の2点です。

- ・日本文化体験——ドイツ人も日本人も日本を学ぶ。  
またその派生形として地方バスツアー
- ・ドイツ語限定カフェ——気軽にドイツ語を話す場。  
群馬でも実現に向けて動き出せればと思います。



合宿では、ミーティングの他にもバーベキューや温泉を楽しみ、来年は長野での開催という予定もすでに立てました。さまざまな人と出会え、有意義な時間でした。

最後に、合宿のリーダーとして奔走してくれた東京のタベアさん、ご協力いただいた東京の協会や全国連合会、そしてぐんまの会員、また準備中から合宿中に至るまでご尽力いただいた鈴木会長夫妻にお礼申し上げます。



[最後にみんな笑顔で再会を約しました]

## 5. ドイツ紀行文

### 5-1. 緑もえるドイツを訪ねて (田部井欣司 記)

ぐんま日独協会員の3名とフリー1名の計4名は、Halle an der Saale (通称ハレ。ライプツィヒ北西 35Km) で開催される独日協会連合会の総会に参加する とちぎ日独協会の9泊11日の訪独団に同行しました。

一日目 (5月16日) : 総勢20人の仲間 (Hann Münden で一名合流) は成田を5月16日 (水) 9時45分のフライトでドイツへと旅立ちました。フランクフルトで国内線に乗り換え、ライプツィヒからタクシーにて Maritim Hotel Halle に19時30分に到着。Maritim Hotel Halle 泊。Halle には連続で五泊。



[成田空港に全員集合しました]

二日目 (5月17日) : 橋本孝 とちぎ日独協会々長は会合へ。我々はマルクト広場にある Händel の銅像や Der Rote Turm (赤い塔)、製塩工場など市内見学をしました。Der Rote Turm は町の象徴となる建物の一部で、「献身女性教会」の4つの塔とともに美しいシルエットを描き、この二つの建物はしばしば「町の5つの塔」と呼ばれているようだ。Maritim Hotel Halle 泊。



[マルクト広場の Der Rote Turm]

[昔はこうして製塩していた]



三日目 (5月18日) : ハレ市内ツアー。Haloren チョコレート工場を見学。この会社は1804年設立で、今も生産している工場としてはドイツで一番古いということだ。夕食は Maritim Hotel Halle にて、日本人メンバー中心に中根大使と会食。一時間十分に及ぶ大使の挨拶はドイツ語で行われました。Maritim Hotel Halle 泊。



[Halloren チョコレート工場の売店]

[左が中根大使]



四日目 (5月19日) : 橋本会長は独日協会連合会の総会に出席し、我々は Halle の市内観光に参加。市内の Händel-Haus や Dom などを訪ねる。Freyburg では Sektkellerei 「ROTKÖPPCHEN」でシャンパンの試飲をした。Händel-Haus はこの

町に生まれた音楽家ヘンデルの遺産の保護と研究のためにそれまでの各種の活動の一つにまとめて、2008年に財団法人化したものだ。Maritim Hotel Halle 泊。



[Sektellerei  
ROTKÖPPCHEN]

[Händel-Haus]



五日目 (5月20日) : Dessau の BAUHAUS を見学。  
Maritim Hotel Halle 泊。バウハウス (BAUHAUS) は、1919年ワイマールに設立された建築および工芸・写真・デザイン等を教える学校 (バウハウスとはドイツ語で「建築の家」を意味する)。バウハウス校は、1925年ワイマールからデッサウへと移り、ヴァルター・グロピウスのデザインによるバウハウス校が1926年に落成する。この建物は今日においても、20世紀初期における現代建築の方向を示すものといわれている。



[BAUHAUS ロゴの入った校舎]



[正面玄関]

六日目 (5月21日) : Bad Soden Allendorf の「リンデンバウムの歌」で有名な [門前の泉] や、Hann Münden の Rathaus を見学。

[門前の泉]・・・ツィンベルクにこの街で一番やわらかい水が湧き出していることから、すでに昔から約1000mの木製の導管がその水源から南の市門前の泉まで設けられていた。デッサウ出身の詩人ヴィルヘルム・ミュラーは旅の途中で、ここにある菩提樹・泉・馬留の組み合わせを見て「菩提樹」のインスピレーションを得たとされている。シューベルトの作曲で知られ、現在では“Am Brunnen vor dem Tore“ (門前の泉のほとりで) のタイトルで知られている。BioHotel Werratal 泊。



[門前の泉]



[Hann Münden の木組の家]

七日目 (5月22日) : Höxter の市内見学。Polle に移動し、シンデレラのいるお城を見学後、Weser 川を船で上り村民180人という Reileifzen 村に到着。そこでは、社団法人栃木市観光協会と社団法人ライライフツェン郷土観光協会とで、これまで続いた友好関係をさらに長期にわたり続ける事を誓う「共同宣言」がおこなわれた。Reileifzen の民宿泊。





[Höxter 市内見学へ]

[ライライフツェンの  
みなさんの出迎え]



八日目 (5月23日): ビール工場の **Allesheimer** (アレスハイマー) を見学。ビール  
ビン是最 ても五回は再使用するという。ビール五本とグラスを く。 **Bielefeld** へ移  
動。[Bethel ベーテル]着。 **Hotel Linderhof** 泊



[Allesheimer  
物配送デッキ]

[ビール工場内]



九日目 (5月24日): [Bethel ベーテル] の学校にて施設見学と説明を ける。[Bethel  
ベーテル] は、ドイツのビーレフェルト市 (人 34 人) にある総合 生活 。特  
学校・ 人ホーム・各種病院が び、 者や 人をはじめ、あらゆる社会  
的に い立場の人々が集まって、約 2,000 種といわれている様々な仕事に きながら  
えあい、 りと生きがいを持ちながら らす町です。 **Hotel Linderhof** 泊。



[Bethel ベーテル  
の学校の先生方]

[教会]



十日目 (5月25日): **Bielefeld** から朝 6 時に、バスにて一 フランクフルト空港へ。  
三時間 。仲間三人はさらに旅行を続ける。13 時 50 分機上の人となる。機内泊。

十一日目 (5月26日): 成田空港 8 時 30 分着。なつかしの我が家へ高 バス・アザ  
レア号で向かう。

[感想]・・・すべての行程がバス 用だったので、 物の いが楽でした。訪問する土  
地々々では、メンバーまたは現地の人に説明して頂いてよかったのですが、ドイツ語  
なので苦しみました。 東ドイツから 西ドイツへの の移動でしたが、まだまだ建  
物等の違いが でした。

## 5-2. パンツァー先生訪問記 (高橋 夫 記)

とちぎ日独協会訪独団に同行した後、一行と分かれて一人旅を続け、  
使 団研究第一人者のパンツァー先生を訪問しましたので、その概要をお

2012年5月16日に成田をたちフランクフルト経由でハレに入った。その後、ライ  
ライフツェン・ビーレフェルト・エアフルト・ベルリンを周ってから、5月29日( )  
にいよいよパンツァー先生訪問先のウィーンに入った。11時にペーター・パンツァー  
先生に会うべくウィーン大学の本館の 付に行く。本館の内部はまるで博物館のよう  
だった。やがて先生がお見えになり大学の 内を案内してくれた。先生は ン大学名  
教 であるばかりでなく、独日協会 ン名 会長でもある。現在はウィーン大学で  
教 を取っており 名な日本研究の であり、日本人より日本文化をよく じで  
ある。まず、ウィーン大学の由来から。

ヨーロッパでも由緒ある古い大学であり、最初は 学、 学 法学、医学の4学部  
だけだった。後に 学から経 学や物 学や数学などが 開された。現在は5 人の  
学生が世界各地から学んでおり、 員も2千人とのこと。先生が学んだ40年以上昔、  
リシャ、エジプト、イランからの留学生が多かったが、現在は中国、ロシア、ブル  
リアからが多いという。 書館には2 の 書があり、 本やあらゆる言語  
の本があり、学生は自由に 書館を使用できるのは言うまでもない。特にウィーンの  
置かれた 置からして東 言語は 実している。 覧室は天井が高く周 はびっしり  
と古い 書で まっており多くの学生が 々と 強していたが、このような環 では  
強するしかない。ウィーン大学には過去多くのノーベル を した教 たちが出  
たのも ける。中庭を建物 が んでいるがそこには多くの 名な教 たちの 像、例  
えば、フロイト、メン ー、 博文に 法のアドバイスをしたシュタインなどなど  
100体以上あった。どういうわけか女性の 像はなかった。



食は の学生食 でごちそうになる。 額の には リュームが多い。時間がずれていたせいか学生は多くなかった。食事をしながら 使 団についていろいろ教えて頂く。先生は30年以上に って研究しており色々なエピソードを話して頂いた。面白かったのはドイツ がケルン大 とエッセンのクルップ社の 器工場見学を提案すると 器工場を見学に行ったそうである。先生は当時新聞に描かれた使 団の 画を しており、長年 してようやく見つけたのは に刀を差した が大 の中に 入れて き込んでいるというものであった。これを見つけたときは大変うれしかったとのことで見せて頂いたが、これほど使 団の本 を いた 画はないと思われる。ただ日 に際してドイツから 入した は人 だけであとはイ リスのアームストロング社から 入したとのこと。そういえば日 同 があったのでイ リスもしっかりと経 的な を したのはいうまでもない。ドイツ から使 団をどう見ていたかことについては、幕 が派 した文 使 団いわゆる 内使 団と 使 団の比 について説明してくれた。

\* 内使 団（ 川幕 派 1862年）

1. 最初の日本からの使 団だった。
2. 着物、 刀、 なので 象が強かった。

\* 使 団（明 1873年）

1. 2回目なので 象が い。
2. を着ていた。
3. 当時ウィーン 国博覧会が開催されており、各国の 、 が動き回っていたのでその対 に しかつたのでニュースバリューが かった。
4. 相であったビスマルクから聞いた 強との関係についてのプロシヤの苦労話は公 な話というより、 会の席でのことを木戸孝 が書き留めたものらしい。
5. 回覧実記に書かれている言葉で先生が された 象的な言葉があった。”Die grossen Länder sind nicht zu fürchten und die kleinen nicht gering zu schätzen.“（強国をむやみに れず、小国を軽んじない。）ここでいう強国とはイ リスやフランスであり、小国とはベル ーのことだったらしい。当時ベル ーは国土が小さいとはいえ、 、 で しており国が大きな 国とは の があるとの認 だったようである。

現在ヨーロッパ諸国間で がないのは 民地がなくなったせいではないかと先生のお話だった。 重な 博文の 文のシュタインとの手 のやりとりのコピーや2008年に 館で開催された回覧実記の 覧会の も見せて頂いた。尚、 使 団の は東京大学に多く されているとのこと。このように11時から14時 まで長時間大学の案内と 使 団のお話を聞けるのは大変 重な時間であった。 に、夕食も一緒にして頂けるということで大感謝である。

夕方6時 になり先生は奥様と ち合わせ場所に来られた。奥様は日本人で以前は日本の 社に 務まれていたとのことだった。市内電 子に乗り、ベートーヴェンの住んだハイリ ンシュタットへ。いうまでもなくここはベートーヴェンがハイリ ンシュタットの遺書を書き、また田 交 曲を作曲した場所として有名である。これに先立ちウィーン市内にもあったベートーヴェンの住んだ家も案内して頂いた。当時の家からウィーンを む の向こうに田 や草原がよく見えたとのことであるが、今は一面の建物である。当時 は不動産屋の間ではいつも家を している として有名だったそうで、市内各所にベートーヴェンハウスがある。場所が多いということは観光には好 合である。

市内電 子を上り終点につくとそこがハイリ ンシュタットだった。ベートーヴェンの立像の前を通り、 のからまる家を指さしてマーラーの家だったとのことであるが、もしかすると隣かもしれないと先生のお話。どっちの家にしても立派なお屋である。2分も歩くとベートーヴェンハウスがあり、その隣がオーストリア 屋のホイリ で、昔は農家だったとのことだ。屋外のテーブルは大盛況だったが何とかテーブルを確保できた。まず自家製の 白ワインを飲む。オーストリアワインは美味しいのだが、自国 してしまうため 出に回らないのでそれほど有名ではないとのこと、これこそ地産地 である。自家製の色々な種 のソーセージもすこぶる美味しい。

白ワインを飲みながら先生は 使 団を研究するに至った経過や日本でお のなかつた話、研究の苦労話、2008年の 館の 覧会の様子、長年 けて 集した の も見せて頂きながら楽しい時間はあっという間に過ぎて行った。



以前は良く日本に行ったそうであるが今は年に一度 になってしまったとのことである。 局今日は先生に一日中お世話になったしまった。Pantzer 先生ありがとうございました。

## 6. 28年間のドイツ生活を振り返って（吉田博文 FM群馬インタビュー）

### (1) ドイツに行くことになったきっかけ

ドイツで28年間ピアノの調律として働き、3年前に帰国しました。そもそも、なドイツに渡ろうとしたのか、というとまずドイツに行く前に2年間くらいヨーロッパ旅行をしたのですが、その2年間で「絶対にヨーロッパに住んでおらして見なければいけない」と思ったんです。当時すでにピアノ関係の仕事をしていたので、どうやったらドイツで仕事をしながらおらしていけるかということを考えて、3~4年後に行けるように準備をしたのです。そして1981年にドイツに行くチャンスを得ました。どうやったかというと、手当たり次第に手紙を書いておってもらえないかとおみ続けたんです。その結果、シンメルという会社からおらうという返事がおらえたのです。ということで、ブラウンシュヴァイクという北ドイツの町におらすことになりました。どういう町かというと、ハノーファーという大きな町の近くにおあって、東西ドイツに分かれていた時代に東ドイツに近い地帯にお関係におありました。現在、人は25人くらいでドイツの中では決して小さな町ではありません。住み始めた頃のお象は、「あつ、外国人ばかりだ！」なんて、実は自分が外国人なのですが。それから建物が違いますね。でも、生活環境や生活の方などお日本とドイツはおおていて、すぐおけこみやすぐおれました。行く前は3年おしたらまた日本にお帰ってこようとお思っていたのですが、なんだかんだ30年近くにおなりました。それだけにおんだ住みやすいところおだったのでしよう。

### (2) ドイツ再統一のころのお思い出

ドイツに行った頃はまだ東西ドイツに分かれていた時で、東ドイツの近くに住んでいたことをうまくお用して、時々東ドイツにお旅行をおしていました。西ドイツの人が東に行くときには3月前からお申を出し、おがでてから東に行くことがおできましたが、東ドイツの人が西に行くことはまずおできなかつたのです。そして日本人の場合はというと、旅行者としておに入っていたのです。それでおはライプツィヒとかドレスデンなどおろんなところにお旅行おしてきました。東は当時、おしい国でお材がお手に入らなかつたのです。例えば、家をおすにおあたってお・おコンクリート・ブロックなどがいつも足りなくて、おは持っているのに材がおえなく、屋根におが開いているとか、おされておなくて暗い色の家がおたくさんおありました。それが統一された今はおんお違うんです。おがれた日に東から西へお沢山の人がお入ってきました。検問所のおところで、家でお西ドイツの人々と一緒に東の人々をお出迎えにお行ったり、いろいろお経験をさせておもらいました。あんな早くあんな形で西と東がお一緒になるなんて西ドイツの人々はおほとんどお想像おしませんでした。本当に画期的なことおだったので。統一するお年くらい前から東の人たちが西にお入ってきました。おが働いていた工場にも東の人が働いたりする流れはおあったのですが、統一することまではお考えおられませんでした。

### (3) 音楽に関するドイツと日本のお比

ドイツ語内ではバッハ、ヘンデル、ハイドン、ベートーベン、モーツァルト、ワーグナーなど大音楽家がお出していますね。今でも音楽をお強める人はドイツにお行く

という流れがあります。ピアノなど高価なものはドイツが生産の中心になっています。しかし、一般家庭には日本ほどピアノは置いていないんです。ピアノを習っているお子さんも意外に少ないんです。音楽の教科目になっている学校もあるようなのです。の娘は音楽か美術かのどちらかで美術を取ったんです。家でその理由を聞いて見ると「家に帰れば家でピアノを弾けるから、学校では美術をならいたかった」ということでした。音楽に関しては、ドイツは日本ほど力を入れていないところもあるんです。一方、プロに関しては音楽の国だけあって、世界中から音楽学生とか音楽家が集まってきてますから、聴くということに関してはいいものをいっぱい聴くことができます。オルガンを聴きたければ教会に行くとどこでもすばらしいオルガンを聴くことができるし、練習したい人はどんどん練習されてくれるんです。また、いろいろな町にオペラ場があります。これも大変なのですが、国がサポートしてくれているんです。ですからオペラは2千、3千から観ることができるんです。日本だと、2、3となるのですが・・・ドイツではオペラのほかには、民謡の音楽が多いのです。シャンソンやカンツォーネなどもよく聴くことができます。ドイツ人は日本文化にとっても興味があって日本古来の民謡などは日本よりも盛んかも知れません。

#### (4) 教のの違い

ドイツはのんびりゆったりしている感じで、学校はお昼ごろに終わってしまい、「もう帰ってきているのか」と言う感じです。宿題もほとんど出ません。小学6年生ぐらいまで、このような調子なんです。ということで、時間にゆとりがあるものですから、いろいろなことを学べるのです。女の子だと乗馬なんか人気があるんです。にはほとんど行きません。日本と大きく異なるのは、大学に入るのに入学試験はなく、高校最後の1年間準備期間があって、その1年間の成績を大学に送って選ばれるので、一発勝負というのはいないんです。大学に入ってからが勉強です。大学で学んでいると遅くなくなり、7年生とか8年生がいついそいでくるんです。

#### (5) 近所つきあい

自分の家は自分で建てたんです。古い家を買って回りの水はブルドーザーを借りて自分で掘りました。のりなおし、電気の配線、水の配管、ガスの配管などもしましたが、はじめはわからないので近所のおじさんに教わるんです。まずおじさんのところに手紙に行き、そこで覚えてしまうんです。

#### (6) 食事

ドイツと言うとなんといってもソーセージ、ビールですね。いろいろな種類があるので楽しんでください。たとえばソーセージはケリーブルストといってインビスなど立ち食い出来る場所でカレー味のソーセージなども試してみるといいです。おいしいものからしょっぱいものなどいろいろな味を経験できますよ。

(\* 事務局註:2012年3月に3回にわたってFM群馬で送られたインタビューをFM群馬のご好意によりハイマートへの掲載をさせていただきます。)

## 7. 高校ドイツ留学体験記 (高橋 好 記)

2011年 から約1年間、 はYFUという国際交流財団の高校交換留学プログラムに参加し、ドイツで過ごした。 が高校留学を決めた 由は、ただ にサッカーが好きだったから。本場のサッカーを1年通して見て、生活とスポーツの びつきを で感じたかったからだ。

現地に行って最初の1 月は、日本人同士での語学研 があった。場所はHildesheim という Hannover の南30Kmに 置する人 10 人の 市だ。まだドイツ語ができず、不 でいっ いたった はこの仲間たちと連 を取り合ったりして 分と えられた。

その後、1年を過ごす予定の家 のいる Jena という街に移動し、 の本 的な留学生活が始まった。Jena とはドイツのちょうど真ん中にあるチューリン ン に している。 が 富で地 的にはちょうど日本における群馬県に 通っている。Jena のホストファミリーは教会で働いている人で、毎 教会に行った。教会に来る人たちはとても親切で に色々声をかけてくれた。また、毎 水曜日には子供たちが集まって をして一緒に夕食を食べたりした。日本にいるときは 教のことを考えることは全くなかったが、キリスト教の生活を初めて体験することができた。



はチューリン ンの独日協会会長の Reinhard さんの してくれた ムナジウムの10年生となり、毎日 面電 で通った。クラスは18人のとても小さな演 クラスだった。先生も友 もとても親切で、まだドイツ語の分からない に 語で色々説明してくれたりした。校外学習などもたくさんあり、映画を作ったことや強 容所に行ったことは今でも忘れられない 重な思い出。 念であったが、 の苦手な はホストチェンジをすることにして、再び Hildesheim に ることになった。Jena は自 の多いとても な街で、6月にまた友 やホストファミリーにまた会うことができた。

Hildesheim の学校は世界遺産のミハエレス教会の隣にあった。Jena の学校よりも大きくて、あまり面倒みがよいとは言えなかった。 の楽しみは学校から 課後のクラブ活動、 のサッカー観 に変わった。学校がとてもはやく終わるので、 は 課後サッカー、ラグビー、アメフ



トをしていた。街にはいくつかのスポーツクラブがあり毎月お を って色々な 技をすることができるようになっている仕組みのようだった。日本のような部活動はほとんどなく家 でそういったクラブに入っている人が多かったように思う。そこで毎日 2 時間ほど仲間たちと体を動かした。チームスポーツを んだ は 的に言葉が 要な で・・・最初はとても苦労したが、周りのフォローもあり言葉の を乗り越えることができた。



ブンデスリー 観



香川真司 手と！こんなチャンスも

はブンデスリー の試合を見るため、ドイツの色々なところに行った。ちょうど日本人 手が活 していたこともあり、ドイツ人のファンの方々も たちを かく迎え入れてくれた。ビールをかぶったり皆でわいわい 歌を歌ったり、本当に本当に楽しかった。

また、ホストファミリーと一緒に日本食をつくったりして、自分なりに日本の文化を えてきたつもりだ。 人は を食べられないという先入観があったが、全員がそういうわけでもないことが分かった。人気だったのはお好み き。これは日本のピザなんだと言ったら、自分たちでも具をトッピングしてまた作ってみると言ってもらえた。自分の国に興味を持ってもらえることの しさを感じた。



ホストファミリーとの団

自分の知らない世界を見て感じたり考えたりできて本当に 実した 1 年だったと思う。日本と違ったゆっくりとした時の流れはとても心地よかった。ゆっくりはしているけれどそれ れが自分のやりたいことを自分自身で見つけ、自 の元においてやっているなという 象を けた。最初はサッカーのことしか になかったが、沢山のの人に けられて今無事日本に帰ってくることができた。また、人と人とのつながりについて改めて考えるいい機会となった。もちろんドイツだけではなく、日本においても。